

Y27c

2012年5月21日全国横断金環日食の取り組みへの課題

大西浩次(長野高専)、高橋 淳(水海道一高)、篠原秀雄(蕨高)、松尾 厚(山口県立山口博物館)、齋藤 泉(栃木県子ども総合科学館)、大川拓也(東工大)、小野智子(国立天文台)、尾花明(聖隷浜松病院眼科) ほか

2012年5月21日月曜日の早朝、日本列島の主要都市を横断する金環日食が起きる。この金環日食では日本の人口の約7割に相当する人々が金環日食帯内に居住し、それ以外のほとんど全ての地域でも、2009年の皆既日食時の部分日食より大きな食分となる。従って、この金環日食は天文教育の絶好の機会になる反面、「日食を安全に観察する方法」の広報普及活動が不十分な場合、日食観察による多数の目の障害(日食網膜症)を生じる危険性がある。さらに、この金環日食が平日の早朝に起こるため(部分日食のスタートが午前6時半、金環日食が午前7時半頃、部分日食の終了が午前9時頃)現状では、学校での観望会、社会人ボランティアによる観望指導には困難があり、天文台や科学館といった社会教育機関でも、月曜早朝に多数の児童・生徒が集まるような観望会の開催は難しそうである。

それでは児童・生徒の家庭において、適切な監督のもと金環日食を観測する事は可能であろうか。金環日食の観測では、必ず太陽観察用フィルタを必要とするが、日本中の児童・生徒に太陽観察用フィルタを配布することは可能だろうか。また、一般市民の安全確保も重要な問題である。例えば、太陽観察用フィルタを使用しない人には太陽を見ることを禁じ、テレビやインターネット中継を楽しんでもらうのもひとつの方法であるが、せっかくの体感の機会を失うことは教育面からは非常に残念である。以上の問題点から、安全な観測法の広報を徹底するだけでなく、組織的な観望会の構築や、太陽観察用フィルタ類の普及などの対策を急ぐ必要があると考える。